2023.10.17版

日本のアニメーションに遺したもの

TAKAHATA ISAO
A LEGEND IN JAPANESE ANIMATION

高畑勲展

2023年 12／27（水）
↓
2024年 3／31（日）

【休館日】毎週月曜日（ただし1／8（月祝）、2／12（月祝）は開館）、1／9（火）、2／13（火）、年末年始（12／29→1／1）

年内は12／27（水）・28（木）のみ開館、新年は1／2（火）より開館

【開館時間】10時→19時（展示室入場は閉館の30分前まで）

『かぐや姫の物語』（2013年）より　©2013畑事務所・Studio Ghibli・NDHDMTK

【プレスリリースのお問い合わせ】　展覧会担当：安岡・伊藤　　広報担当：岡田・大庭

静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1葵タワー3F
tel. 054-273-1515（代表） fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

高畑勲展 －日本のアニメーションに遺したもの
TAKAHATA ISAO A LEGEND IN JAPANESE ANIMATION

日本のアニメーションの礎を築いた
スタジオジブリ・高畑アニメーション創造の軌跡。
半世紀にわたる奮闘を、1300件超の作品と資料でたどる

1960年代から日本のアニメーションを牽引し続けた高畑勲（1935-2018）。『アルプスの少女ハイジ』や『火垂るの墓』、『かぐや姫の物語』などの監督（演出）を務め、それまで映画化は不可能とされてきた題材や新しい表現に次々と挑戦し、国内外の制作者にも大きな影響を与えました。本展では宮崎駿や大塚康生、小田部羊一など、初期から高畑作品を支えたスタッフによる絵コンテやレイアウト、原画、背景画とともに、高畑直筆の制作ノートや企画書、音楽設定など、1300件超の作品や資料をとおして名作アニメーション誕生の裏側を展観します。また、絵を描かない高畑の「演出術」というポイントに注目し、多数の未公開資料も紹介しながら多面的な作品世界の秘密に迫ります。

会　　期：2023年12月27日（水）～2024年3月31日（日）【全80日間】

休 館 日：毎週月曜日〈ただし1/8（月・祝）、2/12（月・祝）は開館〉、1/9（火）、2/13（火）、年末年始（12/29～1/1）

年内は12/27（水）、28（木）のみ開館、新年は1/2（火）より開館

開館時間：10:00－19:00（展示室入場は閉館の30分前まで）

観 覧 料：一般1,500（1,300）円、大高生・70歳以上1,100（900）円、中学生以下無料

＊（　）内は前売および当日に限り20名以上の団体料金　　＊障がい者手帳等をご持参の方および必要な付添の方原則1名は無料

前 売 券：10月28日（土）から12月26日（火）まで販売

［取扱場所］静岡市美術館（窓口、オンラインチケット）、ローソンチケット［Lコード：48683］、セブンチケット［セブンコード：102-606］、チケットぴあ［Pコード：686-625］、谷島屋（パルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店）、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店、大丸松坂屋静岡店友の会

主　　催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団、Daiichi-TV

後　　援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、NHK静岡放送局

企画協力：スタジオジブリ

協　　力：（公財）徳間記念アニメーション文化財団

制作協力：NHKプロモーション

静岡展特別協賛：セキスイハイム東海

Daiichi-TV開局45周年記念

みどころ

① 高畑勲監督作品の全貌を知る初の回顧展

② 1300件超の作品と資料で
名作アニメーション誕生の舞台裏を展観。
各シーンの映像とともに楽しめます！

③ 映画上映会など、多彩な関連イベントを実施
＊詳細は展覧会チラシ裏面をご覧ください

《電車》　JR静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分
静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

《新幹線》東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

《車》　東名静岡ICより約15分
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

《空路》　富士山静岡空港より静鉄バス
（静岡エアポートライナー）で約1時間

高畑勲（1935-2018）

撮影：篠山紀信

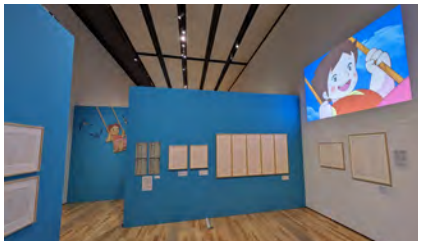
1935年 三重県生まれ、岡山県で育つ
1959年 東京大学文学部仏文科を卒業。同年東映動画（現・東映アニメーション）に入社
1968年 劇場用長編初監督となる『**太陽の王子 ホルスの大冒険**』完成
1974年『**アルプスの少女ハイジ**』（テレビ）全話を監督
1976年『**母をたずねて三千里**』、1979年『**赤毛のアン**』（共にテレビ）全話を監督
1981年『**じゃりン子チエ**』、1982年『**セロ弾きのゴーシュ**』（共に脚本・監督）
1984年『風の谷のナウシカ』のプロデューサーを務める
1985年 スタジオジブリを設立
1986年『天空の城ラピュタ』のプロデューサーを務める
1988年『**火垂るの墓**』（脚本・監督）
1991年『**おもひでぽろぽろ**』（脚本・監督）
1994年『**平成狸合戦ぽんぽこ**』（原作・脚本・監督）
1998年 紫綬褒章受章
1999年『**ホーホケキョ となりの山田くん**』（脚本・監督）
2013年『**かぐや姫の物語**』（原案・脚本・監督）
2015年『かぐや姫の物語』が第87回アカデミー賞の長編アニメーション賞にノミネート
フランス芸術文化勲章オフィシエ受章
2018年 4月5日、82歳で亡くなる

＊太字タイトルは出品作品です

〇主な著作
『映画を作りながら考えたこと』(1984)、『十二世紀のアニメーション』(1999)、『アニメーション、折にふれて』(2013) など多数。また、小学6年の国語の教科書（光村図書出版）に掲載されている『「鳥獣戯画」を読む』の作者としても知られている（2008－）。

会場イメージ（参考写真：三重会場）

映像とともに
楽しめる展示空間！



第1章：出発点　アニメーション映画への情熱

高畑勲は1959年東映動画（現・東映アニメーション）へ入社し、20代からアニメーションの演出家（監督）を目指します。本章では日本のアニメーション史において画期的であった若き高畑の演出術を、遺品の中から見つかった膨大な未公開資料とともに、その制作プロセスに焦点を当てながらご紹介します。また、多種多様な資料の中には自筆の譜面も多く含まれます。高畑が初期作品から映画音楽に深く携わっていたことにもご注目ください。

若き高畑の出発点！

「ぼくらのかぐや姫」

（1960 年前後、企画、未発表）

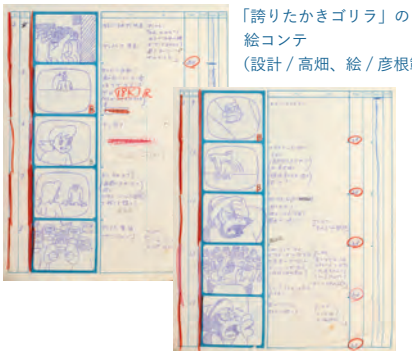
遺作『かぐや姫の物語』（2013）を制作する半世紀以上前に記していたメモの一部

新人離れした技術とセンスを発揮

『狼少年ケン』

（1963-1965 年）　© 東映アニメーション

セル画 + 背景画



「誇りたかきゴリラ」の絵コンテ（設計 / 高畑、絵 / 彦根範夫）

東映動画在籍時『ホルスの大冒険』制作の頃の高畑

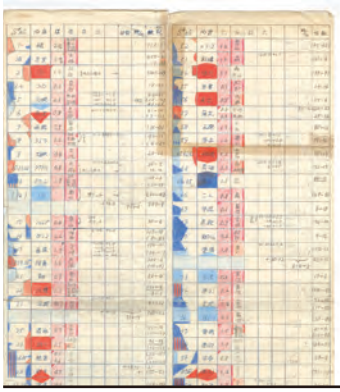
（撮影：大塚康生）

集団制作の導入、複雑な作品世界の構築…すべての常識を覆した革新的長編

『太陽の王子 ホルスの大冒険』

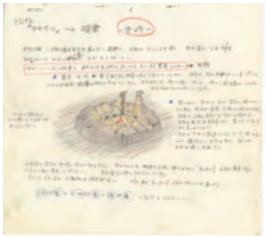
（1968 年）　© 東映

高畑による登場人物の複雑な人間関係と心理状況を示した図

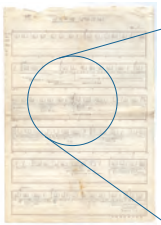


高畑による各シーンごとの作画担当表

森康二による色紙



宮崎駿による「チキサニの上に太陽」の企画についての意見と提案



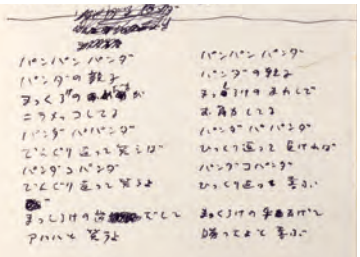
高畑による「婚礼の唄」の譜面とシーン構成を考えたもの

第2章：日常生活のよろこび　アニメーションの新たな表現領域を開拓

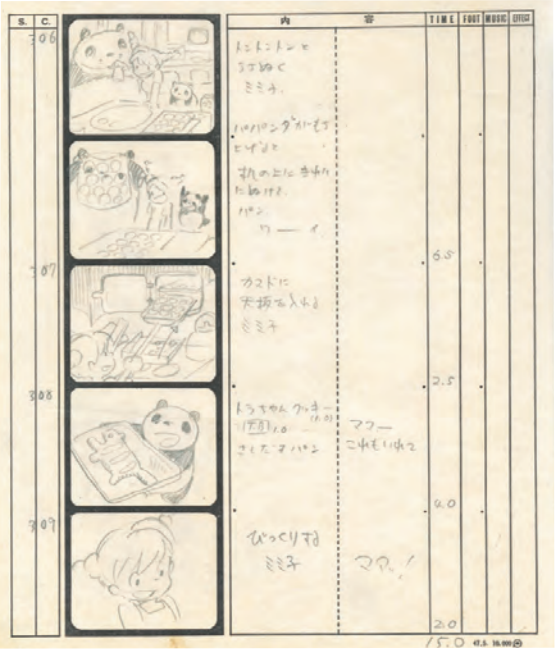
東映動画を去った高畑は、テレビの名作シリーズで新境地を切り拓きます。毎週1話を完成させなければならない時間的な制約があるなか、一切の妥協を許さずさまざまな表現上の工夫を凝らし、1年間52話で完結する質の高い作品の数々を生み出しました。
本章では宮崎駿、小田部羊一、近藤喜文、井岡雅宏、椋尾篁らとのチームワークを、絵コンテやレイアウト、背景画などによって検証し、高畑演出の秘密に迫ります。

リズミカルな繰り返しと変化で想像力を刺激する

『パンダコパンダ』（1972 年）　©TMS



左：高畑による歌詞の一案
右：宮崎によるレイアウト



『雨ふりサーカスの巻』で削除されたシーンの絵コンテ（絵 / 宮崎、文字 / 高畑）

第3章：日本文化への眼差し　過去と現在の対話

高畑の関心は次第に日本を舞台にした作品へと向かい、その風土や庶民の生活のリアリティーをいきいきと描き出すことに注力します。1985年にスタジオジブリ設立に参画すると、『風の谷のナウシカ』(1984)や『天空の城ラピュタ』(1986)のプロデューサーを務めながら『火垂るの墓』(1988)を発表。日本人の戦中・戦後の経験を現代と地続きのものとして語り直す手法や、現地調査に基づく徹底したリアリズムは、海外でも高い評価を得ます。

原作者・野坂昭如に「アニメ恐るべし」と言わしめた

『火垂るの墓』（1988 年）

© 野坂昭如／新潮社 , 1988

左：セル画 + 背景画
下：近藤喜文と山本二三による
ポスターのためのイラスト
（セル画 + セルブック + 背景画）

タヌキの生態と「化け学」を描く

『平成狸合戦ぽんぽこ』

（1994 年）

©1994 畑事務所・Studio Ghibli・NH

上：ポスターのためのイラスト（セル画+背景画）
下：イメージボード

「思い出編」(1966年)と「山形編」(1982年)…過去と現在を異なるスタイルで描いた

『おもひでぽろぽろ』（1991 年）

© 1991　岡本螢・刀根夕子・Studio Ghibli・NH

左：セル画 + 背景画
右：セル画 + セルブック
+ 背景画

衣食住や自然との関わりなど日常生活を丹念に描写した

『アルプスの少女ハイジ』（1974 年）

©ZUIYO　「アルプスの少女ハイジ」公式ホームページ　http://www.heidi.ne.jp

左：セル画 + 背景画
右：小田部羊一による主要キャラクターの
デザインスケッチ

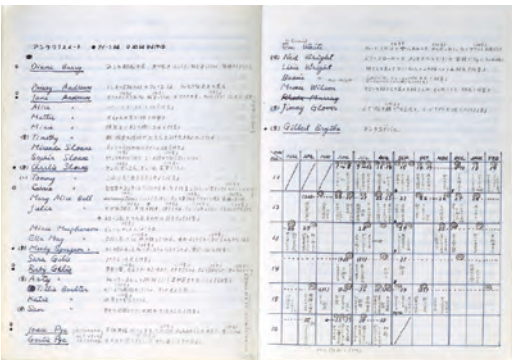
シリーズを通して
成長していく少女の姿を描いた

『赤毛のアン』

（1979 年）

©NIPPON ANIMATION CO.,LTD.
“Anne of Green Gables” ™AGGLA

近藤喜文によるキャラクター・スケッチ



高畑の『赤毛のアン』の準備ノートより。
左頁はアンのクラスメートの名前と性格、
右頁はシリーズ後半のエピソードの年間カレンダー

第4章：スケッチの躍動　アニメーションの新たな表現領域を開拓

高畑は90年代になると絵巻物研究に没頭し、その伝統的な視覚表現の中に日本のアニメーションのルーツを見出します。絵巻物のように人物と背景が一体化した表現を模索した高畑は、手描きの線の質感を生かした描法と、余白を残した淡彩画により、従来のセル様式とは一線を画した新たな表現に到達しました。本章ではデジタル化が急速に進む中、あえてスケッチ（活写）にこだわった膨大な作品と資料により、遺作となった『かぐや姫の物語』誕生の舞台裏をご紹介します。

着彩ボード

隠れた名作！
ジブリ作品で唯一
ニューヨーク近代美術館（MoMA）の
永久収蔵品となった

『ホーホケキョ となりの山田くん』（1999 年）

©1999 いしいひさいち・畑事務所・Studio Ghibli・NHD

手描きの線が動く原初的な感動と
想像力を刺激する余白の美しさ

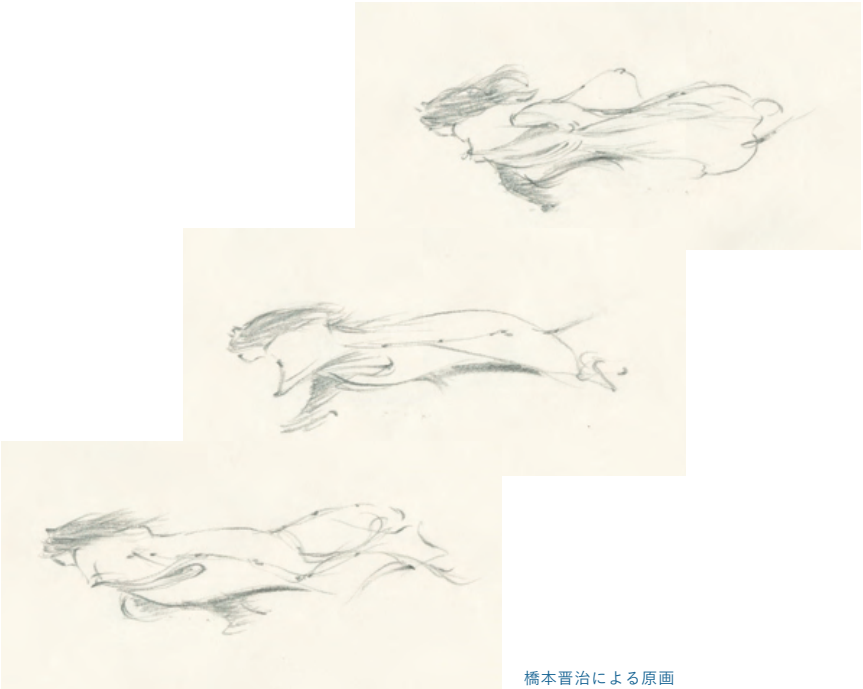
『かぐや姫の物語』

（2013 年）　©2013 畑事務所・Studio Ghibli・NDHDMTK

男鹿和雄による作画に着彩＋ボード

男鹿和雄によるボード

橋本晋治による原画



橋本晋治による原画